

登場人物



桐野 利秋
Toshiaki Kirino

西郷と散った薩摩武士

吉野村実方に生まれ、初め村半次郎と称しました。剣術の使い手で、「人斬り半次郎」と恐れられました。戊辰戦争を経て明治新政府で活躍するも、明治6年(1873年)西郷に従い帰郷。私学校の幹部として後進を育成しました。西南戦争では事実上西郷軍の総指揮を執りましたが、城山にて西郷と共に戦死しました。

西郷どんの足跡



南洲翁開墾の地の碑

— 鹿児島市 吉野 —

吉野寺山に開墾社をつくった西郷は、周辺およそ39ヘクタールを開墾し、自らも生徒と共に労働に汗を流しました。碑に示された題字は東郷平八郎によるもの。近くには、島津斉彬によって作られた寺山炭窯跡(平成27年登録の世界文化遺産構成資産)があります。

【住所】
鹿児島市吉野町寺山ふれあい公園付近
【問い合わせ先】
鹿児島市公園緑化課 Tel.099-216-1366

祝 2018年 明治維新150周年幕開け & 西郷どん放映!

次回「西郷と大久保」※予定



歴史深掘り
ストーリー

本文：南九州歴史学会
画：KENRO
監修：徳永 和喜(西郷南洲顕彰館)

第5話

吉野台地の開墾

西郷どんが設立した、学び・働く開墾社

新政府から離れ、鹿児島島に帰ってきた西郷どん。吉野で開墾社を設立し、生徒とともに汗を流しました。今回は、そんな西郷どんと開墾のお話。

吉野開墾社の設立

明治七年(一八七四年)六月、西郷は多くの青年士族のために旧鹿児島城(鶴丸城)跡に私学校を創設。また、翌年の明治八年(一八七五年)四月には、吉野寺山(鹿児島市)の地に開墾社を設立します。これは下士官養成機関である旧陸軍教導団の生徒のうち、西郷と共に帰郷してきた面々を中心として設立された、労働と共に学問を行う機関でした。

開墾場に出る者は、毎朝八時ごろに宿舎を出発し、なたや鎌、くわなどの道具を使いながら、荒れ地の草を払い、土を掘り起こすなどの労働を行いました。また、宿舎に残る者はみんなのために炊事や掃除などの家事仕事に励み、生活を支える役割を担います。開墾に出た者が午後三時から四時ごろに引き揚げてくると、夜は宿舎の二階でそれぞれ勉学や読書に向かうという日課でした。時には昼間にウサギやイノシシ狩り、夜には集団討論なども行われたようです。開墾し、出上上がった農地には、米・アワ・サツマイモ、桑や茶の木などが植えられ、彼らの食糧などに充てられました。

このように共に働き共に生活をする中で、互いが高め合い研さんしていく人間形成の場になったのでしょうか。

通りかかって馬を引き上げてくれました。西郷は「馬を引くのが下手です」と笑って礼を言ったそうです。吉野の地には、そんな少し意外な西郷の一面がしのばれる「駄馬落の碑」もあるのです。

主君・斉彬の遺志を引き継ぎ

西郷の腹心の部下である桐野利秋も、西郷と共に帰郷した後、自ら吉野郷宇都谷久部山の開墾を行っています。人里離れた原野での生活でしたが、彼を訪ねて来る人も多かったようです。佐賀の乱を起こした江藤新平もその一人でした。江藤は山川で西郷に乱への協力を求めますが断られ、その後、鹿児島で桐野と会っています。桐野は潜伏を勧めましたが江藤は鹿児島を去り、江藤の腹心である徳久幸次郎と石井竹之助を吉野に潜伏させます。役人が

開墾地での西郷

開墾に対する思いの表れか、西郷は熱心に吉野の地へ足を運んだようです。当時、西郷の自宅は武(鹿児島市)にありましたが、およそ三里(約12キロメートル)の道のりを足繁く通っていました。そして、自らくわを振り、肥料を運ぶなど汗を流し、開墾社の生徒と共に食事をとり、夜の討論などにも参加していたといわれています。

そのころの様子を、いところである大山蔵に宛てた手紙の中で知ることができます。大山は西郷をぜひ中央政府に復帰させたい思いを持っており、そのきっかけとして、西郷と一緒に欧州視察へ行こうという誘いの手紙を送りました。西郷の返事は断りの内容でしたが、その手紙の中で、最近はずっと農民になりきって農作業に励んでいることや、最初は苦労したけれど最近とても楽に田畑を耕せるようになってきたことなどを楽しそうに語っています。

また、西郷が開墾社から武に帰る際に馬にサツマイモの袋を二俵背負わせ引いていたところ、途中で馬が道の下の畑に落ちてしまいます。背中にたくさんのサツマイモを背負っているため馬は起き上がれず、西郷も突然のことに途方にふていていたところ、近くの人が

捕縛に来ると、桐野はその役人たちに怒鳴って追い返した、とも。二人は後に共に西南戦争で戦死しています。

また西郷は、鹿児島以外での動きの一つとして、北海道開拓にも熱心に関わっています。屯田兵設置の前段階として、桐野を北海道へ派遣しました。

このような積極的な開墾への動きは、尊敬する主君である島津斉彬の影響とも言えるでしょう。

島津斉彬は近代化の取り組みの中で、早くから農業や開墾について着目していました。国家の基本は農業であり、領民に農業への取り組みを勧めることが政治の基本である、との考えを持っていた斉彬の遺志を継いだ西郷らは、豊かで近代的な日本を支えていく基盤を作るため、自ら率先して若者たちと田畑で汗を流したのかもしれない。